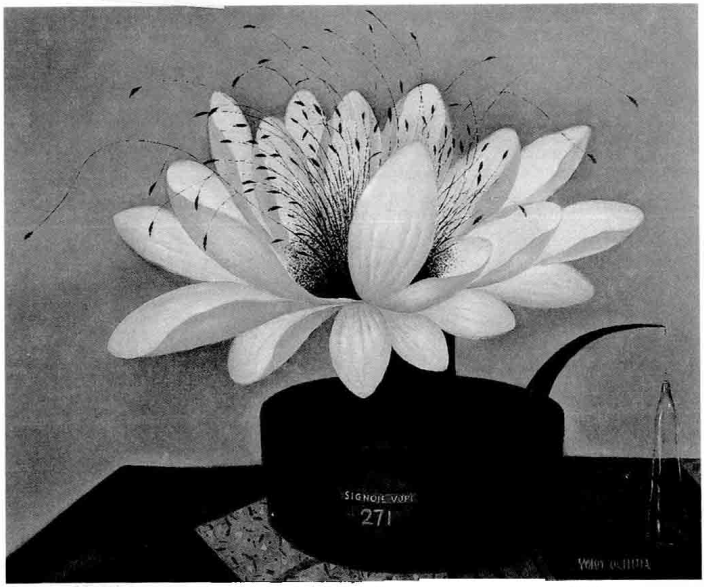
今日をありがとう

人生にひるまない365日の言葉

曽野綾子



今日をありがとう

曽野綾子

徳間書店

曽野綾子（その　あやこ）

一九三一年、東京生まれ。聖心女子大英文科卒。幼い頃からカトリック教育を受け、一七歳で受洗。五三年、作家の三浦朱門氏と結婚。翌年、「遠来の客たち」で文壇にデビュー。以来、小説にエッセイにと多彩な文筆活動の一方で、各種審議会委員や福祉など種々の社会活動にも携わる。著書に『無名碑』『神の汚れた手』『誰のために愛するか』『昼寝するお化け』など多数。七九年、ローマ法王庁から聖十字架章を受けた他、日本芸術院恩賜賞（九三年）、吉川英治文化賞（九七年）、ヘレン・ケラー・スピリット賞（二〇〇〇年）など数々の賞を受ける。

今日をありがとう　人生にひるまない365日の言葉

第一刷　二〇〇〇年一二月三一日

著　者　曽野綾子
発行者　牧田謙吾
発行所　㈱徳間書店
〒105-8055　東京都港区東新橋一-一-一六
電話　〇三-三五七三-〇一一一（大代表）
振替　〇〇一四〇-〇-四四三九二

印刷所　㈱廣済堂
カバー印刷所　真生印刷㈱
製本所　大口製本印刷㈱

落丁・乱丁本はお取りかえいたします

（編集担当　柳　久美子）

©Ayako Sono. 2000, Printed in Japan

ISBN4-19-861280-3

暮れになるとカレンダーをあちこちからいただく。

女優さんの大きな笑顔のついているのなどは、堂々としすぎていて、わが家ではどこへもはる場所がない。家の人々の好きなのは、比較的小型で、芸術的な絵が印刷されているようなものらしい。

しかし、私にとって、これこそカレンダーだ、と思えるのは一つしかないのである。よく商店の店頭などにかかっている、いわゆる日めくり、と言うのだろうか、一日一日破り捨てるようになっている暦で、この手のカレンダーは贅沢なのか旧式で人気がないのかめったにいただかないし、買うチャンスもあまりない。

日めくりが好きなのは、そこに格言のようなものが書いてあるからである。そば屋さんの店で、たぬきうどんなどを注文し、目の前にその日めくりがかけてあった

りすると、うどんが運ばれてくる前に、じっとそこに書いてあることばを見て考えるから、待ち時間がちっとも長く感じられない。「一日一善」なんて書いてあるのを見れば反射的に今日は何かいいことしただろうかなどと考える。本当のことを言うと、善などというものは、何をさすのか、もうとっくによくわからなくなっているのだが。

（中略）

しかしそれでもなお、日めくりについている格言には、人間が己（おのれ）を律することを、一つの信仰に近いものと見ている面もあれば、同時にそれを世渡りの術として使おうとする哀しい配慮も臆面のなさも感じられて、私はやはり、人間に深いいとおしさを感じてしまう。

格言の中には「早起きは三文の得」などというのもあって、懐しい気分になる。私は物書きとしては早寝早起きだろうと思うけれど、冬の寒い日には、暖かい蒲団（ふとん）の中からどうしても出たくない。心理学者に言わせれば、人間には胎児の時代の記憶があって、暗く暖かい子宮の中に丸くなって戻って行きたいという欲求があるのだそうだが、それを考えれば私のような怠（なま）け者の心こそ自然で早起きはむしろから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だに悪いのかもしれない。

「笑う門には福来る」というのも一般論としては本当なのだろうが、私は、一生にこにこ明るく笑いながら、妻が死に、娘が死に、家が空襲で焼け、一生ろくなことがなかったある職人さんを知っていたりするので、これを信じることは一種の凄絶な戦いの予感にふるえるような気がする。サローヤンの小説には、笑うと泣き顔になるという少年の話があった。しかし情報の時代などといい、大のおとなまで色つきテレビが二六時中傍でちらちらしていないともう落着かなくなった、という時代に、壁の日めくりに、突如として「沈黙は金」などと読めるのは気持のいいものである。

私は来年こそ、ぜひ日めくりを壁にかけたいと考えている。（『あとは野となれ』より）

本書は、ページを開いたままにしておける製本になっています。卓上に置いて、日めくりのように朝な夕なにご覧ください。【省】と【励】の二つの言葉が載った日があります。【省】は、どちらかといえば戒めの言葉、【励】は、どちらかといえば慰めの言葉。その日の心が求めるほうをお読みいただけます。（編集部）

装幀　北村武士
装画・本文画　落田洋子
編集協力　岡部泰子

一月

1月1日

人生はワンダーフルだという。初めて英語に接した時、ワンダーフルという単語は「すばらしい」とか「すてきな」という意味だと習った。しかしワンダーというのは「驚嘆すべきこと」「不思議なものごと」という意味で、人生がワンダーフルだということは、「人生は、不思議な驚嘆すべきものごとで満ちている」という意味になる。人生は当人にも予測しがたいことに満ち、それが受け手にとってすばらしいかどうかは、二の次である。

しかし意図しなかったことではあるが、自分が思いもかけない道を歩ませられ、それがそれなりに意味があったことを発見できた人は「人生はすばらしい（ワンダーフル）」と言うようになる。その人は成功者なのである。そういう境地に達するには、自然の成り行きこそ神の望むところだったという認識が力を発揮している。

（それぞれの山頂物語）

1月2日

人間は、つきたての餅のようなものである。すぐ、なだれて、くっつきたがる。違いを違いのまま確認するということが、実は恐ろしくてたまらない。できたら、ひとと何とかして違わないのだ、と思いたい。しかし、実際はれっきとして違っているので、つい、悪口を言いたくなるのである。

もし、或る人が「いいえ」と言う勇気を持っていたら、どんなにこの世は生き易くなるだろう。「いいえ」ということは、決して、相手を拒否することでも、意地悪をすることでもない。むしろ多くの場合、それは各々の立場が違うことの確認である。「いいえ」を言える人は、当然、「はい」の言える人でもある。友達に何かを頼まれる。それは、或る場合には、それほど気楽にできることばかりではないかも知れない。時には、自分が少々不便し、辛い目にあい、不利を承知で引き受ける。それが本当の「はい」である。ヨーロッパで戦争中レジスタンスをした人びとは、その運動に加わることを承認した「はい」の一言のために、生命さえも賭けたのである。

それができなければ、相手に悪く思われようと、「いいえ」と断らなければならない。相手にも悪く言われたくない、損もしたくない、でうろうろしている人を見るくらい、侘しいものはない。

（あとは野となれ）

1月3日

先日、テレビで、おもしろいデータを教えてもらいました。「生きがいがない」と答えた婦人たちだけに、さらに、「今、はっきりした生活上の不満があるか」と質問したところ、「不満がある」と答えたのは、その中の四分の一だけで、四分の三は「これといった不満はない」と答えた、というのです。

不幸だから、生きる気力を失う、という考え方は、実はかなり前から、まちがいだということが、心理学者の間でわかって来ていました。むしろ魂の死におびえるようになるのは、外的な環境が整えられた時なのだ、ということが、この何気ないアンケートの中でも、実証されてしまったのです。それは恐らく、人間の心が、ひび割れているからで、怠(なま)けたくもあると同時に働きたくもあり、金銭的に不自由したくないと同時に少ない金を使う楽しみも味わいたく、責任をとらされるのはまっ平であると同時に責任の重い仕事もしてみたい、という、まことに矛盾した希望があるからなのです。

（仮の宿）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1月4日

【省】

愛というものは、それだけでひとつの完結した世界なのだろうと思う。愛はしかも実用品ではない。何かで買うこともできない。求め方のルールもなければ、その結果がどうなるかという保証もない。

それはしかし、生命そのものである。

（あとは野となれ）

【励】

「私ね、彼を愛している間は苦しかったわ。でも、今、少し憎み出したら元気が出て来ました」

「愛なんてだめなんだよ、不安定で。愛に比べたら、憎しみは長続きする。僕はこの頃、愛するのと憎むのと、さして違わないような気がして来たな。ことに憎しみも悪くないよ。憎しみという形で、どん底から安定した人間関係って、よくあるからなあ」

（神の汚れた手〈下〉）

1月5日

過度、ということはすべていけないらしい。過度の潔癖、過度の勤勉、過度の正義感、過度の自信、過度の楽観、過度の節約、過度の食欲、過度の家族愛。どれを取ってみても、過度でなければ、美徳になる要素が、量が増えると突然変質して、すべて自己を破壊し攻撃する手段になる。

人間はほどほどでいいのである。何とか生きて行き、何とか相手に迷惑をかけず、何とか時間が流れ、何とかおもしろいと思っていられれば、大成功人生なのである。

かつて謙虚ということは単なる美徳であった。或いは、謙虚に多くを望まないこと、完璧を期さないことは、気力のない人間の一つの特徴のように非難されることもあった。

しかしそれは人間の分際、己の力量、人の運命を知る、という知恵以上に、自分の身を守る現実的な効力を有していたのかもしれない。純粋培養によるひ弱な人間が増えたために、不純の強みと見られるものが、再び見直される時代になったのである。

（正義は胡乱）

1月6日

「あなたは？　何がご本職ですの？」

「僕はね、少し金ができれば、旅をして歩いてるんです」

野口は優しい眼つきになって言った。

「金はないんですけどね、もう日本中ずいぶん歩きました。ことに僕は冬が好きでね。しんしんと雪の降る頃、必ず北陸か山陰の小さな宿に一週間くらい泊りましてね。来る日も来る日も、炬燵に入って吹雪やみぞれを聞きながらカニ食べるんですよ、なあに、有名な宿じゃない。小さな粗末な宿ですからね。カニなんて、村の魚屋が茹でて、村の人に安い値段で売ってるんです。それを買って来て僕たちに出すだけだから知れてますよ。

そんなふうにして暮してますとね、僕は、つくづく、ああ、僕は社会の表街道をバク進するような生活をしてなくてよかったなあ、と思うんですよ。あの銀色の空の下のみぞれの音。北国の冬、ご存じですか？」

（至福―現代小人伝）

1月7日

そのようにして、数十年間の壮年期を終わると、人々は今度は再び受ける生活に還(かえ)る。孫に手をひいてもらったり、息子にこづかいをもらったり、嫁にご飯を作ってもらったりする。これは別に少しも屈辱的なことではない。彼らはもう充分に働いて来たのだし、老いは自然の成り行きであって罰ではないのである。

また、おむつを当てた寝たきり老人になっていても、なお人間としての尊厳を失わない人がいる。それはどんなに辛(つら)くとも感謝を知っている人々である。なぜなら感謝というものは一見感謝する人が下の位置におり、感謝される人が上位にあってその恩恵を与えているように見えるが、本当は立場が逆なのである。なぜなら感謝するという行為は、感謝される相手に喜びを与えるから、力なく病(や)んだ老人の方がまだれっきとして与える側にいるのである。

（辛うじて「私」である日々）

1月8日

【省】

人間は常に勝利者になることはできない。しかし勝利者になるのも敗者になるのも、人間の心が慎(つつま)しくその運命を受けいれれば、得るものは同じくらい大きく豊かな筈(はず)だと思う。

（まず微笑）

【励】

「まいりました」と優れた人物に向って頭を下げられる人間は、実は勝ったように見える人間より強い場合も多い。勝つこともいいが、私は堂々と負けられる人間が好きである。ごまかしたりうちのめされたりせず、「そうだ、あいつはこのことに関しては、確かに僕よりできる」と言える人を見ると美しいと思う。

（あとは野となれ）

1月9日

私が「ヨブ記」に出会ったと感じたのは、その講義によって、ヨブが最後に報いられたという話の部分は勧善懲悪の好きな読者のために、後世の福音史家が書き加えたものと思われる、と教えられたからです。つまり本当の「ヨブ記」は、神に忠誠を尽し続けたヨブが、少しも報いられぬままにさんたんたる死を迎える物語だったと言うのです。

私は嬉しかった。これほど壮烈な人の死にざまと、平凡で偉大で恐ろしい運命を描いた文学は他に読んだことがありませんでした。

私は安心してこの世の不合理を承認でき、迷えるような気がしました。真理はこの世でかたがつくようなものではない。この世で答えが出るものではない。かたもつかず、答えも出ず、評価もされないからこそ、私たちは死にもの狂いで、そのことについて悩み考えるのです。これが神の謀略です。そして、すぐにかたがつき、答えと評価が出るような現実は私流の言い方をすれば、どこかちゃちな感じがしてしかたがなかったのです。

（仮の宿）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com